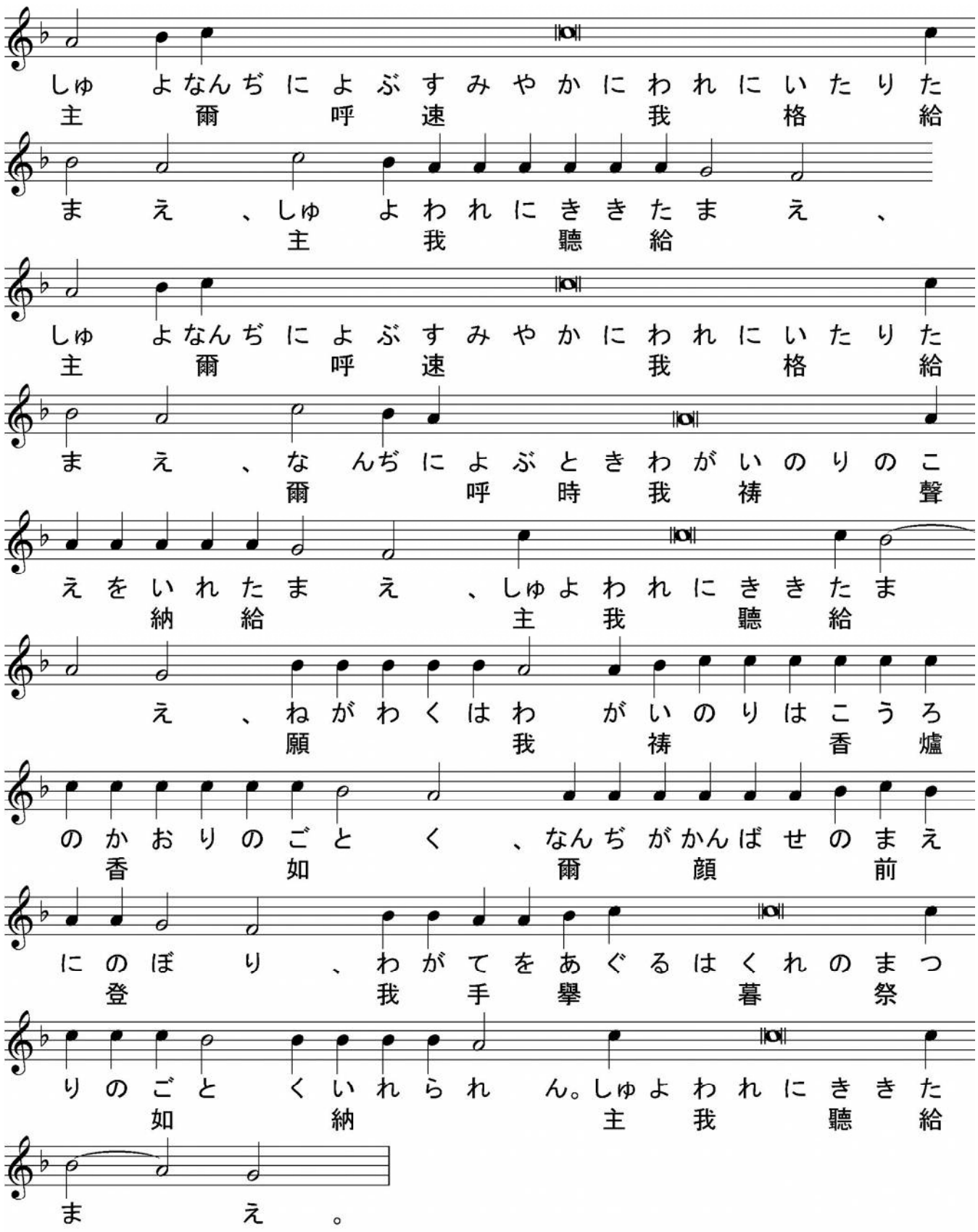
【　第 140 聖詠　第 7 調　】



誦經）主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言に傾きて、不法を行う人と共に、罪の推諉せしむる毋れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と

美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の惡事に敵す。彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聽く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる毋れ。我が爲に設けられし弶、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【　第１４１聖詠　】

我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は我の避所なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聽き給え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

主よ、我放蕩の者の如く爾の恩寵に離れて、仁慈の富を費せり。慈憐なる主よ、爾に趨り附きて爾に呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給え。

⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

主よ、我放蕩の者の如く爾の恩寵に離れて、仁慈の富を費せり。慈憐なる主よ、爾に趨り附きて爾に呼ぶ、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給え。

④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

受難者よ、爾等は己の血の流を以て甚しき不虔の焔を滅して、世界に衆

の爲に敬虔の光明を照せり。爾等は虚名なる諸神と、其惡臭の祭祀と、宮とを盡く焚きて、地に在る者の爲に最潔き光を輝かせり。我等之に照されて、無神の暗を脱れ、偶像の迷を避けて、世界に大なる憐を賜うハリストスに伏拜す。

③願わくはイズライリは主を恃まん、蓋　憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其　悉くの不法より贖わん。

主よ、爾の諸聖人は信の盾を具足し、十字架の記號にて己を堅め、勇ましく己を苦に付して、惡魔の驕慢と誘惑とを空しくせり。彼等の祈禱に由りて、全能の神として、世界に平安、我等の靈に大なる憐を降し給え。

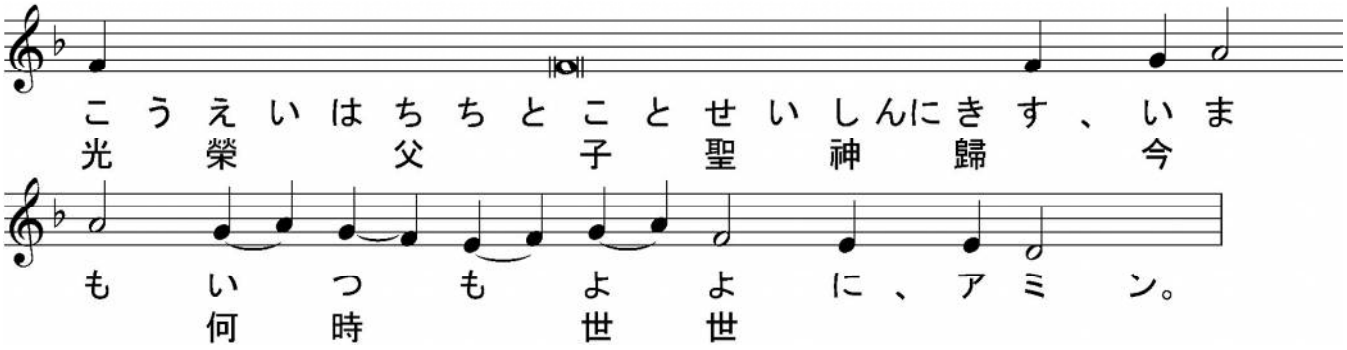
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

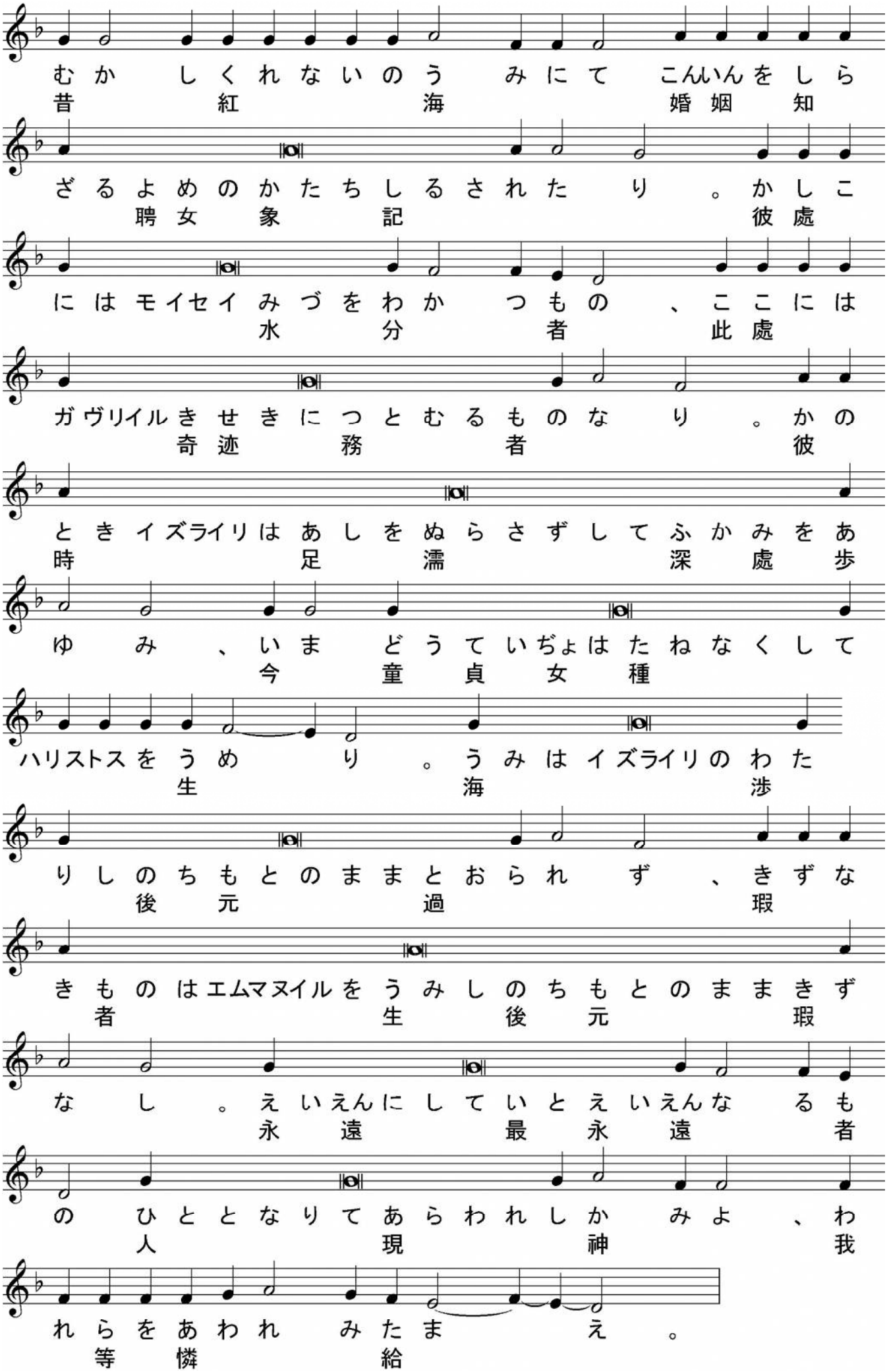
主よ、爾の諸聖人は信の盾を具足し、十字架の記號にて己を堅め、勇ましく己を苦に付して、惡魔の驕慢と誘惑とを空しくせり。彼等の祈禱に由りて、全能の神として、世界に平安、我等の靈に大なる憐を降し給え。

①　蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至りて讃美たる致命者よ、爾等は凡の地上の事を意とせずして、勇ましく己を苦に付し、望みし福を得て、天の國を嗣ぐ者と爲れり。仁愛なる神の前に勇敢を有ちて、世界の爲に平安、我等の靈の爲に大なる憐を求め給え。

【　生神女讃詞　第５調　】

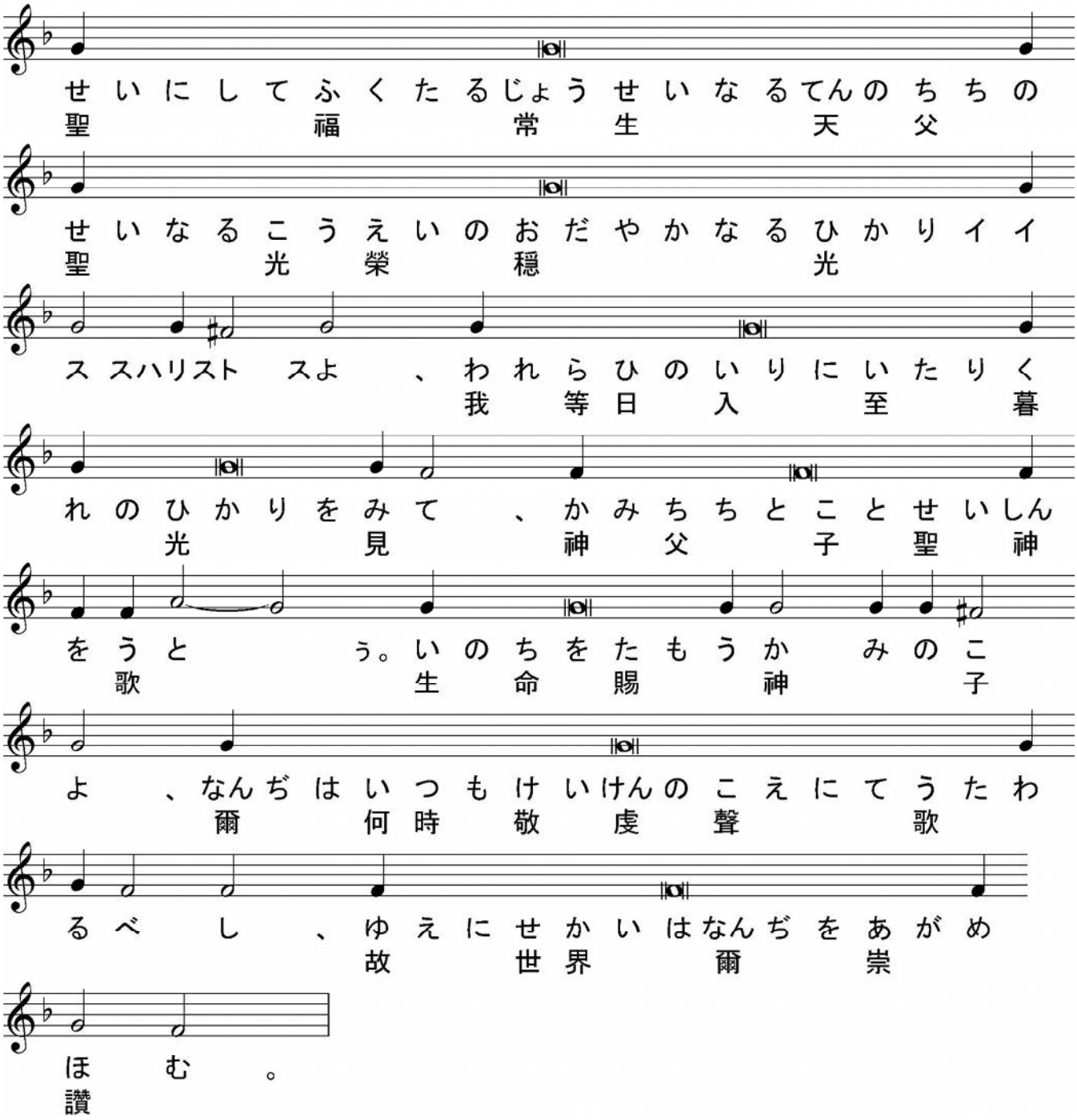



むかしくれないのうみにてこんいんをしら
昔紅海婚姻知
ざるよめのかたちしるされたり。かしこ
聘女象記彼處
にはモイセイみづをわかつもの、ここには
水分者此處
ガヴリイルきせきにつとむるものなり。かの
奇迹務者彼
ときイズライリはあしをぬらさずしてふかみをあ
時足濡深處歩
ゆみ、いまどうていぢょはたねなくして
今童貞女種
ハリストスをうめり。うみはイズライリのわた
生海渉
りしのちもとのままとおられず、きずな
後元過瑕
きものはエムマヌイルをうみしのちもとのままきず
者生後元瑕
なし。えいえんにしていとえいえんなるも
永遠最永遠者
のひととなりてあらわれしかみよ、わ
人現神我
れらをあわれみたまえ。
等憐給

【　聖入　】

司祭）睿智（えいち）、肅（つつし）みて立（た）て、

【　聖ソフロニイの祝文　】

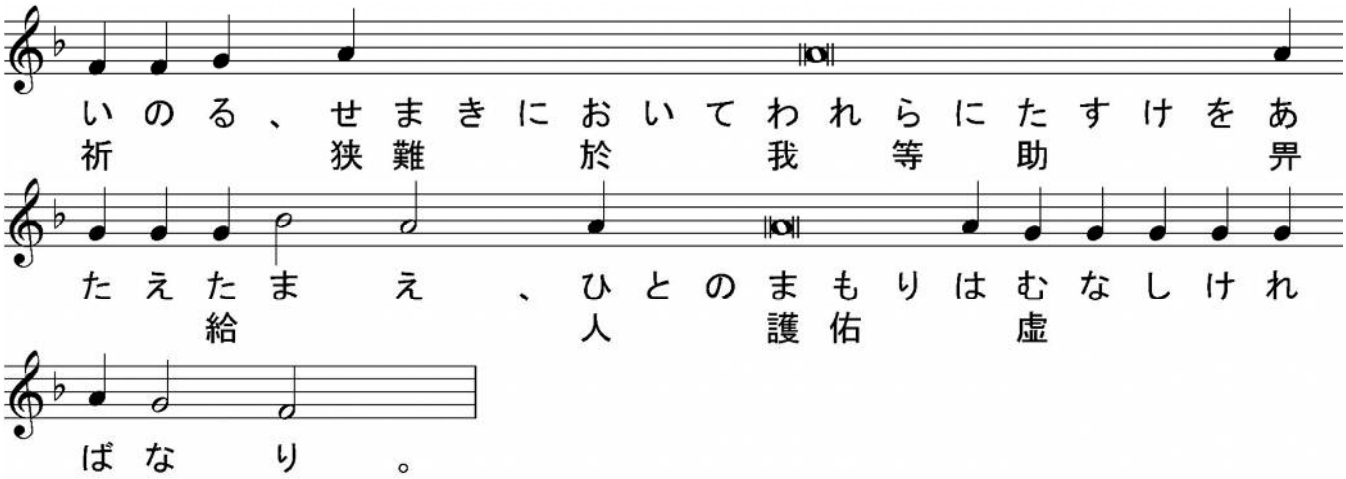


【　第一の提綱（プロキメン）　】

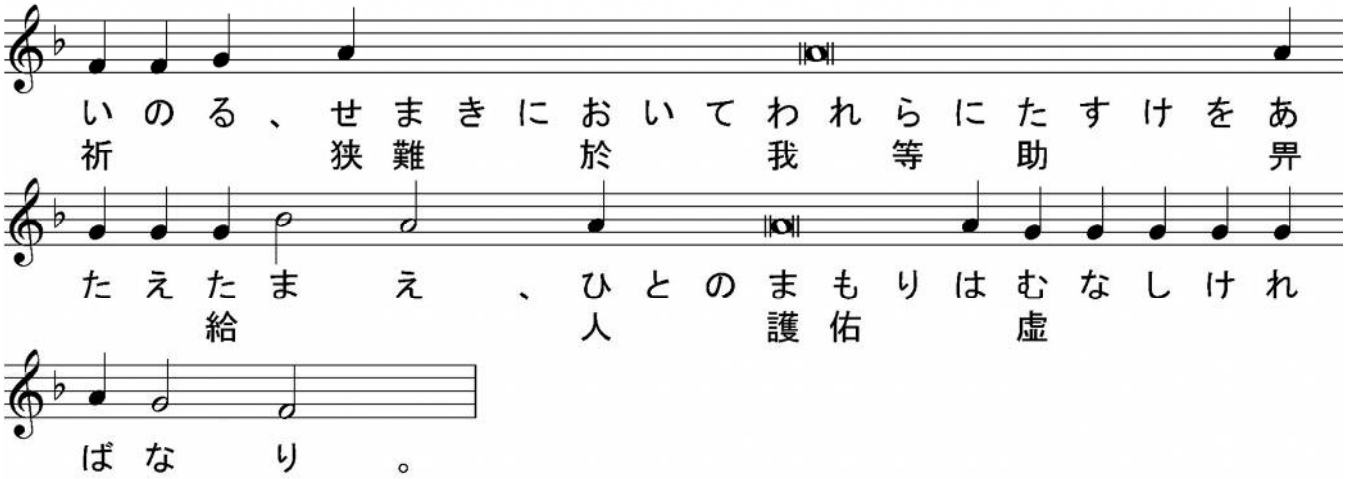
司祭）謹（つつし）みて聽（き）くべし、衆人（しゅうじん）に平安（へいあん）、睿智（えいち）、謹（つつし）みて聽（き）くべし。

誦經）プロキメン、第四（だいし）の調（しらべ）、祈（いの）る、狹難（せまき）に於（おい）て我等（われら）に助（たすけ）を畀（あた）え給（たま）え、人（ひと）の護佑（まもり）は虚（むな）

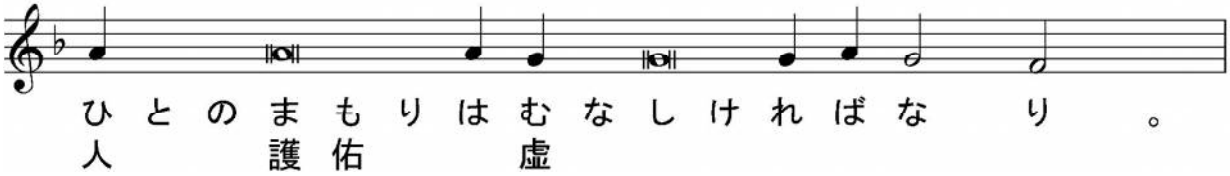
しければなり、



誦經）神よ、爾我等を棄て、爾我等を敗れり、



誦經）祈る、狭難に於て我等に助を畀え給え、



司祭）睿智、

誦經）創世記の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

【　創世記　8 章 4～21 節　】

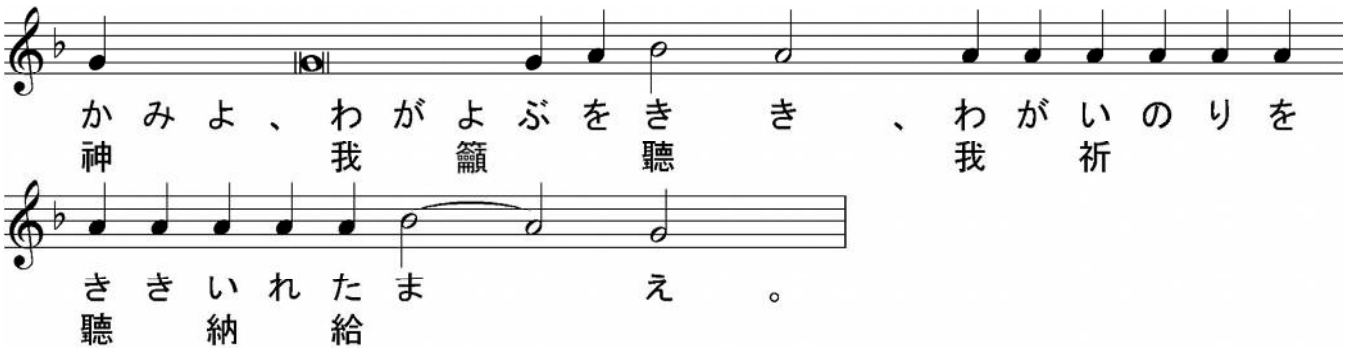
誦經）方舟は七月に至り、其月の十七日にアララト山に止まれり。水漸く減じて十月に至り、十月の朔に山の峯現れたり。四十日を歴て後、ノイ其方舟に作りたる窻を啓きて、鴉を放ちたれば、水の地に涸るるに至るまで、翺り

て往來せり。其後彼は地の面より水の退きしかを見ん爲に、鴿を放ちしに、鴿は其足を止むる所を得ずして、彼に方舟に還れり、水全地の面に在りたればなり、彼手を伸べて之を取り、方舟に己の所に入れたり。又七日を待ちて、再鴿を方舟より放ちしに、鴿暮に及びて、其口に橄欖の新葉を銜みて彼に還れり、是に於てノイ水の地の面より退きしを知れり。更に又七日を待ちて、鴿を放ちしに、復彼の所に還らざりき。ノイ在世の六百一年の一月の元日に水地に涸れたり、ノイ作りし所の方舟の蓋を啓きて、水の地の面に涸れたるを視たり。二月の二十七日に至りて地乾きたり。主神はノイに謂いて曰えり、爾及び爾の妻、爾の諸子及び爾の諸子の妻、共に方舟より出づべし、爾と偕に在る凡の獸、及び凡の肉、鳥より家畜に至るまで、及び凡の地に匍う者を己と偕に引き出せ、此等は地に散じて、地の上に生み且殖ゆべし。是に於てノイ及び其妻、其諸子、其諸子の妻、共に出でたり、凡の獸、凡の家畜、凡の鳥、凡の地に匍う者、其類に從いて方舟より出でたり。ノイは主の爲に祭壇を築き、凡の潔き家畜及び凡の潔き鳥より取りて、燔祭を壇の上に獻げたり、主は其馨しき香を享けたり。

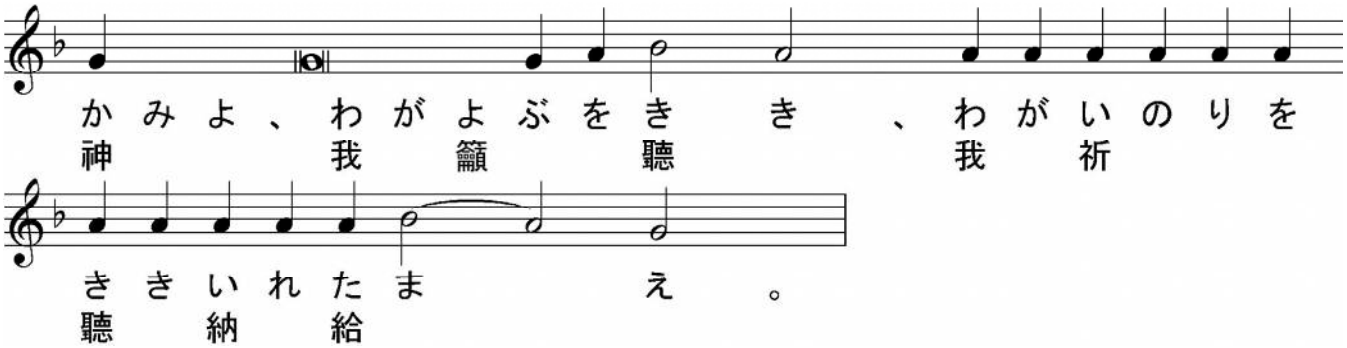
【 第二の提綱 】

司祭） 謹みて聽くべし、

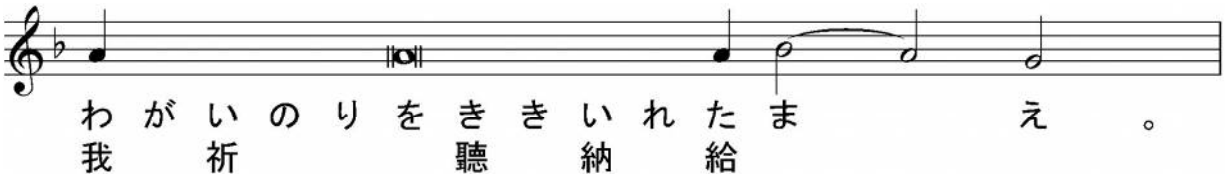
誦經）プロキメン、第六の調、神よ、我が籲ぶを聽き、我が祈を聽き納れ給え、



誦經）我地の極より爾に呼ぶ、



誦經）神よ、我が籲ぶを聽き、



【　祝福　】

司祭）睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經）箴言の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

【　箴言　10 章 31 節～11 章 12 節　】

誦經）義者の口は智慧を流し惡者の舌は斷たれん。義者の唇は悅ぶべきことを知り、惡者の口は戾れることを語る。詐僞の權衡は主の惡む所、正しき重量は其悅ぶ所なり。驕傲來れば耻辱も亦來る、謙る者と偕に智慧あり。義者は死して痛惜を遺し、惡者の滅は俄にして喜悅を致す。正直者の端莊は彼等を導き、悖逆者の邪曲は彼等を滅さん。貨財は震怒の日に益なし、惟義は死より救わん。無玷者の義は其途を坦にし、惡者は其惡に因りて跌れん。正直者の義は彼等を救い、不法の者は其不法に因りて執えられん。義人は死して後其望絶えず、不法の者の望は亡ぶ。義者は艱難より救われ、惡者は代りて之に陷る。貳心の者は口を以て其鄰を亡し、惟義者は知識に因りて救わる。義者幸福を獲る時は邑

樂(たの)しみ、惡者(あくしゃ)亡(ほろ)ぶる時(とき)は歡(よろこび)あり。義者(ぎしゃ)の祝福(しゅくふく)に因(よ)りて邑(まち)は高(たか)くせられ、惡者(あくしゃ)の口(くち)に因(よ)りて圮(くづ)さる。智慧(ちえ)なき者(もの)は其鄰(そのとなり)を侮(あなど)り、智慧(ちえ)ある人(ひと)は緘默(もだし)を守(まも)る。

※　願わくは我が禱は、、、へ